

も有名になったこの劇的部分はどういう資料・証言によって支えられているものかというばかりしいとも言える疑問をもったことに端を発する。

サンドラールの筆名の由来はこのエピソードから説明されるのことが最近多い。それは、エレヌが生きながら燃えたというその衝撃から詩人は誕生したということで、灰(cendre サンドル)から蘇る不死鳥という連想でサンドラール Cendrars となった、という説明である。じつは、15年前に、この連載を始めたときには、ほくも、この見栄えのよい、いかにも、というエンディングで納めようという心づもりだったのである。

しかし、当時もこの肝心のエピソードの出典はほくは知らなかった。その内に分かるだろうと思っていたのだが、ほくを納得させるものを見出せたわけではなかった。ほくは調査魔ではないし、そう自信があるわけではないが、一応できるだけのことはしたつもりだった。それと、ここまでサンドラールの幼・少年時代を詮索してきた経験からの直観みたいなもので、どうもすっきりしない。

そこで、今までも何度かそうしてきたように、こういうときは、旧知のサンドラール研究家として有名なユーク・リシャールさんに訊ねるのが手っ取り早い。リシャールさんは、本職は詩人でカタログ古本屋さん。ジュラ山脈のなかのポン・デ・マルテルという鄙びた村に、奥さんと二人でひっそりと住んでいる。

リシャールさんからの回答は、自分にも分からないが、ミリアムが個人的に何かを持っているとしか考えられない、というものだった。そうになると、ミリアム・サンドラールさんに直接照会するほかない。

即実行、というような機敏さを持たないほくは、かなり時間をおいて、逡巡しつつ、彼女に手紙を出した。パリ西郊のブローニュに住む彼女からは丁寧な返事がまもなく来た。「エレヌ」に関する部分は次の通りであった。

「わたしの著書『ブレーズ・サンドラール』におけるエレヌについての詳しい記述は次のものに基ついています。すなわち若いとき(すなわちまだフレディだったころ)のブレーズの手帳、ベルンのブレーズ・サンドラール文庫に保存されている資料、かれの友人オーギュスト・シュテルに宛てた幾つかの書簡、母から渡ってきた資料、口伝てに教えてもらった思い出話です」

(以下次号)

## ブレイズ・サンドラール小伝(6)

加太宏邦

この小伝を(5) (『ロマンディ』第8号)まで書き続けて、それから10年間、放置してしまっただ。それは、ほくの怠惰がなによりの原因であるが、その他に、言訳を許していただければ、ある問題にひっかかってしまって、そこをめぐって、どうにもならなくなったということもあるのだ。

そのことを述べるまえに、この小伝の目的と今までのいきさつをいささか書いておこう。

この伝記は「小」とついているが、これは詩人サンドラールの簡略な伝記という意味でなく、かれの誕生から詩人としてデビューするまでの、ほんの「短い期間」を調べたもの、という意味である。したがって、内容は、むしろ瑣末なことにまで及ぶ、「非文学的」なものかもしれない。

サンドラールは周知のように一種の「虚言癖」があって、かれの誕生から青年時代までの伝記というのは、それに引っ張られて、従来、一般には随分でたらめが流布していた。そのことは第1回目でも例示しておいたが、もちろん、この小伝は、それを正して、得意顔をしようというものではない。むしろ、多分に、いらぬおせっかいと知りつつ、また、いささかとまどいながら、いくつかの妄想を逞しくし、サンドラールの「正体」にせまるスリルを味わう悦しみをもちたいという動機で始めたものなのである。

彼の出生地であるスイスのジュラ山脈の中のラ・ショ＝ド＝フォンという町のこと、ヌシャテルやバーゼルでの生活、先祖のこと、父、母の素顔、兄と姉の身辺、ナポリ時代の生活、学校の通知簿、パスポート申請原簿による17歳時のアイデンティティ、革命前のモスクワとサンクト・ペテルスブルグの姿、血の日曜日・レーニン・サンドラールという同時代三題嚙などを調べて書くのはけっこう楽しかった。

そして、のちにのべるが、やがて、ここに一人の女性が登場することになる。この女性の身元が気になって、調べなくてはならない羽目になった。しかし、はな

しはそうかんたんに済まなかった。思いの他、厄介なことが出てきて、これがうまく解決せず、すっきりしたら書こうと思いつつ、ここまで延引してしまった。とは言っても、この間、そんなにこの調査に専心していたというわけでもない。

その上に、あろうことか、彼の娘ミリアムが父親の浩瀚な伝記 (Miriam Cendrars: Blaise Cendrars, 1984, Balland) を出版してしまったのである。つまり、ぼくのジタバタ騒ぎは、ほとんど無に帰したのである。頭に血が昇る、というのはこういうことをいうのだろうか。肉親、それも娘の手になる伝記に、東洋の涯に住む何の縁もないものが書くへっぼな文が、かなうはずがないではないか。

もうやめようと思った。そう、思われたのだが、すこし、頭を冷やして考えてみると、じっさい彼女は、サンドラール 32 歳の時の子供で、ぼくが今扱っている、誕生から 20 歳ころまでについては直接の立会人ではないのだ。

ただ、ぼくと決定的にちがうのは、彼女の周辺には、サンドラール本人はもとより、サンドラールを語る人々が多くいただろうことだ。そのうち、一番おおきな存在は彼女の母、つまりサンドラールの妻である。しかし、詩人の妻フェリチエ (通称フェラ) は、ミリアムの生後間もなく、子供たちをつれて夫と事実上別居のような状態になる。それと前後してサンドラールは舞台女優のレモヌ Raymonne Duchâteau との交際を深めていく。ミリアムはサンドラールと同じ屋根の下で生活した体験が少ないのである。それを年譜式に記すところなる。

1909. 春      サンドラール 21 歳。フェラ Féla Poznanska と会う。

1914.4.14    長男 Odilon 誕生

1914.9.16    フェラと結婚

1916.4.9     次男 Rémy 誕生 (1945.4.25 戦死)

1919.12.23   ミリアム誕生。この頃から、フェラは子供たちを引取り、別居がちになる。「レミーが生まれると、フェラはカンヌ、ニース、ある山村、イギリス、サンレモ、そして再びニースと転々とした。初めは、ブレース [サンドラール] も一緒にいることがあったが、やがてちょっと顔出しするていどになり、やがてめったにしかか、あるいは偶然にしかフェラには会うことがなくなった」(ミリアム p329)。

1942.        フェラ死

1945. ミリアム初めてレモヌに会う。

1949.10.27 レモヌと結婚(1917頃知り合う。すなわちサンドラール30歳)

ところがミリアムが、同書で献辞をささげているのは、レモヌの方で、そこに「母の記述したもの、思い出話、個人的に保有していた資料を通して、本書の著述に間接的に参加してくれた」母に感謝をすると述べている。このことからわかるように、ミリアムはフェラからの伝聞、資料を得ることは少なかつたろうと想像される。一方、フェラとサンドラールは1909年の春にベルン大学の廊下で始めて会っているのだが、ほくの「小伝」の対象とする時期、とくにその後半は、フェラの方が本来ならカバーしているはずなのだ。

すると、ミリアムが情報源としたレモヌでは、詩人の幼年・少年時代は「直接に」は知りえないことになる。そうなると五分五分とは言わないが、まだほくの立ち入る隙間くらいあるのではないかと勝手な納得をはじめた。それから、なにより、ほくをはげましてくれるのはサンドラールに「虚言癖」があるということである。第4回でも、ひとつ紹介しておいたが、彼は妻(レモヌ)に対しても、幼い時のことを「作り話」しているのである。それは、彼のラジオでの対談番組の速記から知ることができるが、ほとんどフィクションとも言える幼、少年時代物語なのである。しかし、レモヌはおとなしくというか、感心してそれを聴いているのである。奥さんと言えども、いや、詩人を愛する奥さんなればこそだまされているのだ。

さて、今、サンドラール、すなわち少年フレデリック、通称フレディは、17歳。 Санкт・ペテルスブルグにいる。ほくが怠けているうちに、世界は変わり、レーニングラードもソ連もなくなり、ちゃんとサンドラールが滞在していた革命前の呼び名に戻ってしまったようだ。

先回は、17歳のサンドラールがペテルスブルグの時計宝飾店に就職、はるばるロシアまで出かけ、その到着直後に「血の日曜日」を体験するところまで書いた。1905年1月9日(露暦)の出来事である。

ペルスブルグでの生活はその後、約2年と3ヵ月続くが、この間、ミリアムは後の詩人からのイメージを拡大して、秘密結社に参画し革命運動に加担し、一方、サ

ッカー、乗馬、音楽、演劇を楽しむ、旅をし... と後に発表された *Le lotissement du Ciel* などの作品を引用しつつ書いている。しかし、いく度も言うように、作品を参考に出来ないのが、サンドラールの伝記のやっかいな点で、むしろ、ほくはおそらく、非政治的体質のサンドラールからは、少なくとも、前段はありえなかったことと思う。むしろ、ある種の商売の才をもつかれば、けっこう優秀な店員だったのではないかとかんがえる。とにかく、往時の直接の資料は何もないのだ。ほくが *Le lotissement du Ciel* を見ないようにしているのは、たとえば、ルーバは「サント・ペテルスブルグーの金持ちの宝飾店」で「ダイヤと真珠のコレクションではロシア帝国一を誇る」とかいう記述がいかにもウソくさいからである。当時の『ベデカー』には、少なくともこの店の名前が出ていない。小さな店だとはほくも思わないが、さりとて「帝国一」というのは無理がある。サンドラールの世界は、モノにかんしても空間にかんしても、ワーッと拡大する特徴がある。そのエネルギーが放つ火花が美しいのである。

ロシア情勢はどうなったのか。フレディが18歳になったばかりの、9月5日(1905年)に日露戦争は終わり、ポーツマスで講和条約が結ばれた。日本では当時、夏目漱石が『我輩は猫である』を『ホトトギス』に連載中であった。満州を勢力下に置き、南樺太を手に入れた日本の勢い。真面目に硬直しはじめた日本社会を俳味でおちょくっている漱石。一方、ロシアにはゴーリキーがいた。この血の日曜日を機に一時人党した彼の作品『母』が書かれたのがこの頃で、これは革命精神への讃歌であった。しかし、フレディのような商売人にとっては、たいへん不安な時代の始まりであったにちがいない。さきにもふれたように、宝飾屋などというのは、特権階級と西欧コロニーに支えられた生業だったからである。

敗戦と全国に広がるゼネスト。

かれはその頃に、シベリア鉄道旅行をしたことになっている。作品としての長詩『シベリア横断のうた』では、

そのころほくは少年だった、  
やっとなんざい、もうガキの時代はとっくにわすれてた  
生まれ故郷から遙か一万六千里、  
モスクワにいた、千三本の鐘楼と七つの駅のある町、  
それでもほくにはまだ物足らなかった、

(中略)

さても、ある金曜日、ぼくも、

そう十二月のことだった、

宝石セールスマンのお供して、

ハルピンまで行くという(以下略)

とシベリアへの旅を高らかに歌いあげている。多くの文学辞典では、かれは一応満州、北京まで行ったことになっている。実を言うと、ぼくも、かつてある翻訳書の解説で、そう書いたことがある。今は、さわめて怪しいと思っている。これはたんなる想像だが、当時、旅行書の代名詞にもなっていた『ペデカー』の「ロシア」は、満州と北京を含む仕様になっていて、ちゃんとハルピン Charbin、大連 Dairen、旅順 Port Arthur(Ryojun)、北京 Pekingなどを詳述し、その多くはマニアックなまでの市街地図も付されている。つまり、ぼくは彼がこのガイドブック上の旅をしたのではないかと怪しんでいるのだ。

だが、その真偽は闇の中だ。「パリ・ソワール紙」の社長が、後に、サンドラールの弱みに付け込んでこれを質したことがある。弱みとは、飲み食いである。ちょっとしたレストランにかれを招いて、大いに饗応し、頃合を見計らって「これは、男同士の話なんだが、シベリア横断鉄道、あれホントに乗ったの?」と切り出した。するとサンドラールは一拍おいて、やや憤然とした顔つきで「どこが問題なの?みんなぼくの詩にちゃんと乗ったじゃないか」と答えたという。

その他に、ロシア時代で、明確なものは、ほとんどない。彼がペテルスブルグの帝国図書館で本を借り出していることは分かっている。ラマルティーヌ、シャトーブリアン、コンスタンなどのロマン主義作家、テーヌ、ミシュレ、デュルケムなどの評論家、歴史家、社会学者の著作、ダンテ、ダーウイン、ラ・ブリュイエール、またワグナーに関する本など。さらに『わかりやすい天文学』などである。またいくつかの詩を抜き書き筆写している。おそらくは、これらは、当時の心情に合ったものだったのだろう。これだけである。

そして1907年4月21日、彼はスイスにもどる。19歳の青年になったかれは、バーゼルの駅に下り立つ。見送りの時と同じく、兄と友人のパウル・ハーベルボシュが迎えに出てくれていた。見違えるように成長した弟を発見して兄のジャン＝ジョルジュは「一人の小僧を考えもなしにロシアへやったが、なんと一丁前の男

になって帰って来たよ！」と驚いたようだ。

帰国直後ここに、ほくを悩ますことになるあるドラマが始まる。それはエレヌ Héléne という名前の女性の登場である。いわゆる『黒い手帳』とよばれるノートにその名がでてくるのである。

『黒い手帳』というのは、サンドラールの死後に、彼が長年、保存していたトランクの整理が行われ、いくつかの新資料が発見されたのだが、その中にあった手帳である。ミリアムは、その他の資料と共にこれを整理し、『サンドラール全集』の別巻として出版した。それはわたしたちに貴重な資料となっている。

その表紙の色から名付けられた『黒い手帳』には Freddy Sausey[sic] と名前が書いてあり、年齢 19 歳としてある（後に書き入れたものか?）。手帳の最初の日付は「1906 年 1 月 15 日 - 2 月 1 日」となっているので、ロシア時代に手帳の使用が始まったことが分かる。次の日付が、1906 年 10 月 16 日、18 日、20 日で、先に上げたラマルティエヌを読んだ記録が見られる。『苦痛讃歌』や『うぐいすに寄せる』などからの一節がそのまま筆写されている。このような読書記録が年末まで続くが、これ以外に、とくに彼の生活を知るのに役立つような記録はない。

ところが、翌年(1907年)、1月31日という日付と共に、次のような記述にわたしたちはぶつかるのである。

サンクト・ペテルスブルグ、1907年1月31日

エレヌ、

ほくはあなたの手紙を幾百回と読み返しました。読んで気分がなんと良くなったことでしょう。あなたはその言葉で、ほくという人間のいちばん敏感な機微に触れることを知っていたのですね。病んだ今のほくの心に最良の妙薬です。[中略]。あなたをこの腕で抱き締めたいです。しかし、あなたの手がそっとほくに触れるだけでほくの全身が痛みを覚えるでしょう。ほくの魂は小鳥のように囁き歌っています。魂が浮き浮きし、もう孤独ではないからです。

これは、いうまでもなく、エレヌという女性に宛てた手紙の下書きまたは控えと思われるのだが、じつはこれだけでは彼女がどこに住んでいるのか、何国人な

のか、年齢がどのくらいなのか分からない。内容から恋文だと判断はできるが、それ以上のことは想像する他ない。ところが彼女については、娘のミリアムがその正体をこう明かしている。

「1906年12月か1907年1月にフレディはエレヌとめぐり会う。ロシア人家庭の若い娘さんで、この一家にかれは暖かさと友愛をかんじ、またその娘に恋をしたのである。エレヌ宛の手紙は初回がサンクト・ペテルスブルグからで、後ヌシャテルからとなり、この恋の深さと発展がよく分かる」

『手帳』にもどろう。この第1信の後には、例の読書記録が3月まで続く。そうして、かれはスイスに帰国するわけだが、その帰国した3日後に、「バーゼル、1907年4月24日/11日」という日付(後者は露暦の日付だと思われる)で、再びエレヌ宛の手紙の写しが書かれている。こうして、5月3日、5月14日、5月19日、5月24日、5月26日、6月4日、6月28日と、ところどころに読書記録などをはさみながら手帳での手紙の写しは続いていく。

ところが、この書簡の写しは、エレヌが事故で入院したことを照会する6月28日の書簡で途切れてしまうのである。そのことについて、ミリアムは「どうして唐突に終わったのだろうか?不思議におもって考えているうちに、突然、思い出したことがある。フェラが、フレディの初恋について私に話してくれているときに、エレヌは火傷で死んだ、と言ったことだ。これはレモヌからも確認をしたことである」と付記している。

ミリアムはさらに著書『サンドラール』では、エレヌの身辺をもっと明確にしている。それによると、「彼女はゴロホバヤ通り79番地にあるアパートマンに住むロシア人家族の一員だった。その部屋は、すぐ近くの大店ルッパ宝飾店への卸・修理業をしているクライマン氏とその息子たちの経営する時計工場とつながっていた。クライマン一家は大所帯で、エレヌは末娘。19歳の誕生日を迎えたばかりであった」ということになる。ここにほくを悩ます問題が発生した。その問題は、次の点にも及ぶ。もういちどミリアムを引用しよう。

「ある夜のことだった。エレヌがうつらうつらしたまま、灯を消そうとして、石油ランプを引っくり返してしまったらしい。ベッドに火が燃え移り、それはエレヌに及んだ。エレヌは燃えた。生きたまま燃え、燃えて死んだ」

さて、ほくが困った問題というのは、今では、サンドラールの伝記で、もっと